様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１４日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530121
研究課題名（和文）　近代欧米における制度の政治思想史

研究課題名（英文）　Modern Political Thought and Institutions

研究代表者
小田川　大典（ODAGAWA　DAISUKE）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：60284056

研究成果の概要（和文）：オットー・フォン・ギールケ、ジョン・スチュアート・ミル、ジョン・アダムズ、デイヴィッド・ヒューム、フーゴー・グロティウスの著作の解読を中心に、近代欧米における制度の政治思想の展開について思想史的、理論的な研究を行い、社会思想史学会（2009、2010）で「制度の政治思想史」セッションを開催した。また関連する研究報告を政治思想学会（2011）で行った。

研究成果の概要（英文）：We studied institutionalist political theories of Otto von Gierke, John Stuart Mill, John Adams, David Hume, and Hugo Grotius, and organized research workshops on “Modern Political Thought and Institutions” at the 2009 and 2010 SHST annual meetings. And three of us made related reports at the 2011 JCSPT anual conference.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学
キーワード：思想史、代表制、二院制、連邦制、国民国家、デモクラシー、社会有機体説

１．研究開始当初の背景

本研究は、政治制度論に着目し、近年の研究成果を踏まえつつ、思想史研究と理論研究の対話を試みることで、新たな制度論のパースペクティヴを提示する試みである。メンバーはすべて政治思想史の研究者であるが、研究代表者の小田川大典はＪ・Ｓ・ミルの代表制論、研究分担者のうち、太田義器はグロティウスの国際制度論、犬塚元はヒュームの共和主義論、石川敬史はジョン・アダムズの連邦制論、遠藤泰弘はギールケの国家論というふうに、制度論に着目しつつ、思想史研究と理論研究の関係に常に関心を向けながら研究を続けてきた者ばかりである。

政治学研究の目的のひとつは、政治についての制度論的考察を行なう――具体的な歴史的状況の下にある具体的な政治制度のありようについて、規範的あるいは機能的な観点から

考察する――ための手がかりを提供することにある。だが、こうした政治学の制度論的研究にとって、近年の研究動向は、必ずしも好環境を提供しているとは言い難い。具体的にいえば、近年の政治学、特に政治思想研究には、制度論的研究を困難にするような背景が、少なくとも二つ認められる。

第一の背景としては、多元主義論の隆盛によって、政治論が社会全体の非制度的な次元へと拡散し、政治制度に固有の公的役割を論じることが容易ではなくなったという事情が挙げられる（早川誠、『政治の隘路』、2001年を参照）。たとえば、近年のデモクラシー論にみられるように、伝統的には議会の中での限られた人数での制度的な「審議」を指していた "deliberation" という語が、ハーバーマスの討議倫理の影響の下、一般市民の理性的な「熟議」という非制度的な意味で盛んに用いられるようになっている（田村哲樹、『熟議の理由』、2008年を参照）。たしかにその結果、一般市民のインフォーマルな「熟議」のありようについての議論は深められたといえよう。しかし、果たして、その議論において、議会における制度的「審議」の特殊性に対する問題意識の後退は皆無であったといえるだろうか。

第二の背景は、近年の政治学、特に政治思想研究全般に見られる、歴史研究と理論研究の乖離と齟齬である。政治思想研究の動向を眺めるならば、一方では、ケンブリッジ学派のように個々の歴史的文脈の中で形成される政治的言説の特殊性や偶然性を強調する徹底した歴史研究が行われ（たとえばクェンティン・スキナー、『思想史とはなにか』、1999年を参照）、他方では分析哲学の影響の下、正義や自由の「概念 concetp」から具体的な政策論的「構想 conception」を理路整然と導出する規範理論の研究が行われている（たとえば Philip Pettit, *A Theory of Freedom*, 2001 を参照）。しかしながら、リチャード・ローティが「歴史的再構成」対「合理的再構成」と呼んだこのアプローチ上の対立は（『連帯と自由の哲学』、1999年を参照）、「歴史的」かつ「合理的」な考察を必要とする制度論的考察を困難にせざるをえない。

政治論が社会全体の非制度的な次元へと拡散する傾向に抗しつつ、制度論に焦点を絞り、近年の政治思想史研究の成果を踏まえつつ、歴史研究と理論研究の対話を試みること。これが本研究の問題意識である。同様の問題意識を踏まえた政治思想研究は、内外を見渡すに、決して多くはないが、数少ない例外として、William H. Riker, *The Development of American Federalism*, 1987 や Nadia Urbinati, *Representative Democracy*, 2006 などのほか、本研究のメンバーの著作である太田義器、『グロティウスの国際政治思想』、2003年や犬塚元、『デイヴィッド・ヒュームの政治学』、2004年などを挙げることができる。こうした地道な作業は必ずや、政治思想史研究の成果を、政治学研究全体にとって有意義な制度論のパースペクティヴへと結びつけるであろう。

２．研究の目的

(1)政治理論における制度論の再検討

近年の政治思想史研究の成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度などをめぐる現代の制度論について理論的考察を行う。具体的を挙げるならば、たとえば連邦国家については、従来、これを「統一国家としての連邦国家」の範型で捉え、ＥＵへの適用の困難を強調する見解が有力であったが、政治思想史研究の中で明らかになってきた「連邦国家」概念の歴史的な多様性を念頭

におくならば、これまで類型化が不可能とされてきた「政府間組織でも統一国家でもない」ＥＵの政体をめぐり、より精緻な類型化の可能性を探ることができるだろう。

(2)政治思想史における制度論の再検討
通時的な歴史的文脈と共時的な同時代的文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。しばしば制度論は、具体的な争点との関連で個別的に論じられがちであるが、国際制度の理論的展開を古代から近代まで跡づけた Richard Tuck, *The Rights of War and Peace: Political Thought and the International Order from Grotius to Kant*, 2001 が示すように、思想史の中での制度論は、個別具体的な争点に限定されない、多様な歴史的文脈と同時代的文脈を背景として論じられるのがつねであった。そうした様々な文脈を明確にすることで、様々な制度論の可能性とその限界が明らかになるであろう。

(3)古典的政治思想家の制度論の再検討
グロティウス、モンテスキュー、ヒューム、バーク、ジョン・アダムズ、Ｊ・Ｓ・ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行なう。一見、現代的な制度論の研究とは無縁のようだが、たとえば我が国におけるいわゆる「ねじれ国家」の問題を制度論の問題として考察する上で、政党制や二院制、更には政府内における様々な対立についてヒューム、バーク、フェデラリストたちが展開した議論は極めて豊かな示唆を与えるものであり、実際、たとえば、ジョン・アダムズとトマス・ジェファソンの代表観および国家観をめぐる対立を軸に、党派抗争が政党制に、地域間対立が連邦制に収斂していく理論的契機を歴史的に検討した論文集 James Horn and Jan Ellen Lewis, ed., *The Revolution of 1800*, 2002 や、政党政治の理論的淵源をエドマンド・バークに求める通説的な理解に対して、政治対立を肯定的にとらえた思想の系譜を辿ることでこの問題に接近を試みである Caroline Robbins, ’″Discordant Parties″’, 1958 や John A. W. Gunn, *Factions No More*, 1972, Marco Geuna, ’Republicanism and Commercial Society in the Scottish Enlightenment’, 2002 などは、対立や抗争を重視する現代のデモクラシー論の一潮流とも関連する重要な思想史研究の成果である。

３．研究の方法
(1)理論的考察
近年の政治思想史研究の成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度などをめぐる現代の制度論について理論的考察を行う。

(2)系譜学的考察
通時的な歴史的文脈と共時的な同時代的文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。

(3)歴史的考察
グロティウス、ヒューム、バーク、ジョン・アダムズ、Ｊ・Ｓ・ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行なう。

４．研究成果
(1)理論的研究の成果
①2009年度

関連する研究報告として、小田川が「デューイのデモクラシー論の諸問題」（日本デューイ学会2009年度研究大会、椙山女学園大学、2009年10月）を、石川敬史が「ジョン・アダムズにとってのピューリタニズム」（日本ピューリタニズム学会、聖学院大学、2009年6月）、犬塚元が「歴史/歴史叙述のなかの伝統と革命」（韓国・日本政治思想学会国際学術会議、立教大学、2009年7月）を行なった。また関連する論文として、遠藤泰弘が "Die Neubewertung der Staatslehre Otto von Gierkes im Vergleich mit der Staatslehre Paul Labands"（*Jahrbuch junge Rechtsgeschichte*, 3, 2009.）を、石川敬史が「ジョン・アダムズの政治思想におけるピューリタニズムの契機」（『東京理科大学紀要』、42、2010）を、小田川大典が「デューイのデモクラシー論の諸問題――政治理論研究の立場から」（『岡山大学法学会雑誌』、59巻34号、2010）を公刊した。

②2010年度

関連する研究会として、堤林剣氏（慶応大学）、木村俊道氏（九州大学）、古城毅氏（東京大学大学院）を招致し、社会思想史学会2010年度研究大会セッション「制度の政治思想史」を実施し、太田義器が司会を担当し、犬塚元が研究報告を行なった。関連する研究報告として、太田が第９回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会（2010年8月、広島大学）にて「正戦論の政治思想史的・政治哲学的位置についての予備考察」を報告し、犬塚が International Symposium "Patriotism without Nationalism in the East Asian Context"（the East Asia Institute, Korean University, Seoul, Korea, 2010年10月15日）で "Struggle for Patriotism without Nationalism in Japan: The Case of Maruyama Masao" を報告した。また、太田の「正戦論の理論的根拠と歴史的展開」『ぷらくしす』12巻（2011）、石川敬史の「著書紹介 アメリカ合衆国憲法の古典的基礎 David J. Bederman, *The classical foundations of the American constitution*」（『アメリカ法』2009-2号、2010）、太田が監訳者の一人として関わったハインリッヒ・マイアー『レオ・シュトラウスと神学-政治問題』（晃洋書房、2010）も重要な成果である。

③2011年度

関連する研究として、犬塚元「時間軸において「伝える」こと」（川崎修編『伝える』風行社、2012）、小田川大典ほか編『国際政治哲学』（ナカニシヤ出版、2011）を刊行した。また、政治思想学会第15回研究大会において小田川が「リベラリズムの交錯：Ｊ・Ｓ・ミルとＪ・ロールズ」という題目で関連する研究報告を行なった。また、小田川が共訳者として関わったサミュエル・フリーマン編『ロールズ 政治哲学史講義』Ｉ・II（岩波書店、2011）も重要な成果である。

(2)思想史的研究の成果

①2009年度

関連する研究会として、日本政治学会2009年度研究大会分科会「転換期の政治のコンセプトとコンテクスト」および社会思想史学会2009年度研究大会セッション「制度の政治思想史――連邦制の政治思想」を実施し、『報告集　近代欧米における制度の政治思 想史』をまとめ、研究会報告者と本研究分担者の全員に配布した。

②2010年度

関連する研究報告として、遠藤泰弘が法制史学会近畿部会第412回例会（2010年6月26日、京都大学）で「第二帝政期ドイツの連邦国家論――ラーバント、ギールケ、プロイス」を、ドイツ史研究会（2011年2月19日、東京大学）

で「帝国・国家・ゲマインデ：フーゴ・プロイスの政治構想」を報告した。また、石川が共著者として関わった上智大学アメリカ・カナダ研究所編『キリスト教のアメリカ的展開』（上智大学出版会、2011）と、小田川大典が共著者として関わった荒木勝ほか編『東北アジアの幸福観』（岡山大学出版会、2011）が刊行された。犬塚が共訳者として関わったＤ・フォーブズ『ヒュームの哲学的政治学』（昭和堂、2011）が刊行されたことも重要な成果のひとつである。

③2011年度
関連する研究として、犬塚元「ポスト・コンフェッショナリストとしてのヒューム」（『思想』1052号、2011）、遠藤泰弘「近代国家とは何か」（『ジュリスト』1422号、2011）を刊行した。また、関連する研究報告として、政治思想学会第15回研究大会において石川敬史「『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立」と遠藤泰弘「フーゴ・プロイスとドイツ革命」が、また社会思想史学会第35回大会では、太田義器「正戦論と戦争の違法化」という報告が行なわれた。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 10 件）
①小田川大典、後期ロールズとジョン・ステュアート・ミル：共和主義的転回との関連において、『政治思想研究』、査読無、12号、2012年、6-23頁。
②石川敬史、『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立、『政治思想研究』、査読無、12号、2012年、24-51頁。
③遠藤泰弘、フーゴー・プロイスとドイツ革命、『政治思想研究』、査読無、12号、2012年、87-113頁
④太田義器、正戦論の理論的根拠と歴史的展開、西日本応用倫理学研究会編『ぷらくしす』、査読無、第12巻、2011年、69-82頁。
⑤犬塚元、ポスト・コンフェッショナリストとしてのヒューム、『思想』、査読無、1052号、2011年、62-83頁。
⑥小田川大典、デューイのデモクラシー論の諸問題、『岡山大学法学会雑誌』、査読無、59巻3・4号、2010年、573-585頁。
⑦石川敬史、アメリカ合衆国憲法の古典的基礎、『アメリカ法』、査読無、2009-2号、301-306頁、2010年。
⑧犬塚元、ヒューム『イングランド史』のスコットランド史：1707年合同をめぐる歴史叙述の政治思想、『群馬大学社会情報学部研究論集』、査読有、16巻、2009年、83-100頁。
⑨石川敬史、アメリカ建国期におけるサン=ドマング政策、『東京理科大学紀要』、査読無、41号、2009年、129-151頁。
⑩ENDO Yasuhiro, “Die Neubewertung der Staatslehre Otto von Gierkes im Vergleich mit der Staatslehre Paul Labands,” *Jahrbuch junge Rechtsgeschichte/Yearbook of Young Legal History*, 査読有, 537, 2009, pp. 417-423.

〔学会発表〕（計 10 件）
①太田義器、正戦論と戦争の違法化、社会思想史学会研究大会、2011 年 10 月 28 日、神奈川大学
②小田川大典、リベラリズムの交錯：Ｊ・Ｓ・ミルとＪ・ロールズ、政治思想学会研究大会、2011 年 5 月 28 日、姫路獨協大学
③遠藤泰弘、フーゴ・プロイスとドイツ革命、政治思想学会研究大会、2011 年 5 月 28 日、姫路獨協大学
④石川敬史、『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立、政治思想学会研究大会、2011 年 5 月 28 日、姫路獨協大学
⑤遠藤泰弘、帝国・国家・ゲマインデ：フーゴ・プロイスの政治構想、ドイツ史研究会、2011 年 2 月 19 日、東京大学

⑥犬塚元、制度・型・作法：木村俊道『文明の作法―初期近代イングランドにおける政治と社交』（2010)を読む、社会思想史学会研究大会、2010年10月24日、神奈川大学
⑦INUZUKA Hajime, "Struggle for Patriotism without Nationalism in Japan: The Case of Maruyama Masao," International Symposium "Patriotism without Nationalism in the East Asian Context" (the East Asia Institute), October 15 2010, Korean University (Seoul, Korea)
⑧小田川大典、石川敬史『アメリカ連邦政府の思想的基礎』を読む、社会思想史学会研究大会、2009年11月1日、神戸大学
⑨小田川大典、デューイのデモクラシー論の諸問題、日本デューイ学会2009年度研究大会、2009年10月4日、椙山女学園大学
⑩犬塚元、歴史/歴史叙述のなかの伝統と革命、韓国・日本政治思想学会国際学術会議、2009年7月5日、立教大学

〔図書〕（計4件）
①犬塚元、風行社、（川崎修編）『伝える――コミュニケーションと伝統の政治学』、2012年、272頁（205-235頁）
②小田川大典、ナカニシヤ出版、（小田川大典ほか編）『国際政治哲学』、2011年、344頁（i-xvii、299-301頁）
③石川敬史、上智大学出版会、（上智大学アメリカ・カナダ研究所編）『キリスト教のアメリカ的展開』、2011年、272頁（85-104頁）
④遠藤泰弘、慈学社、（鈴木秀光ほか編）『法制史学会60周年記念若手論文集　法の流通』、2009年、922頁（697-720頁）

〔その他〕
ホームページ等
「制度の政治思想史」ウェブサイト
http://odg.la.coocan.jp/political_thought/
username: political
password: thought

６．研究組織
(1)研究代表者
小田川　大典（ODAGAWA　DAISUKE）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：60284056

(2)研究分担者
太田　義器（OTA YOSHIKI）
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：10277858

犬塚　元（INUZUKA　HAJIME）
東北大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：30313224

石川　敬史（ISHIKAWA　TAKAFUMI）
東京理科大学・基礎工学部・講師
研究者番号：40374178

遠藤　泰弘（ENDO　YASUHIRO）
松山大学・法学部・准教授
研究者番号：30374177

(3)連携研究者
なし